
レイニーソング

梶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイニーソング

【Nコード】

N6825Y

【作者名】

梶

【あらすじ】

高校生歌手・雨宮小夏として名をはせる少女、瀬尾小夏。素直な歌声の魅力で音楽界をリードしていたのも、もう過去の話。彗星のごとく現れた新人歌手・SHEENAシーナにより、ランキング上位の座を奪われてしまう。それからはなにをしても失敗続きの小夏はどこへもやりようのない思いを胸中に抱えていた。しかもそのSHENA、素顔も性別も年齢も非公開の覆面歌手で……。

覆面歌手の名は

あの空を、貫くすべならここにあり。

声という名の矢を放ち、空へ。手を伸ばしても届かない、はるか高みへ声を響かせる。雨のように降り注ぐ音たちをつかんで、息を大きく吸いこみ、翼を広げ、さあ 歌を、

(あ)

思った瞬間の失速。そして、失墜。心に空いたすきまに、ひとつのピースをとり落とす。

その瞬間にきらめく世界は色を失い、薄灰色にあせていく。こぼれていく音の雨。すぐに取り戻せ、と必死に声を張り上げても、落ちていったものは拾い上げられることをかたくなに拒む。音圧が失われ、現実が近づいてくる。真つ暗に沈みゆく視界と、感情の消えていく音楽が小夏を襲う。

(いや……お願い、待って)

懇願しても、けっして戻らない。

伴奏の余韻がぷつりと途絶える。

ヘッドフォンからなにも聞こえなくなったのを確認してから、重い息をついた。

曲が終われば自然と周りに満ちる、完全な無音が耳に痛い。自分を責め立てるようなそれから逃れるようにスタジオの外をふり向くと、窓の向こうのふたりはそろって首をふる。

予想していた答えではあつた。

歌うさなかに浮かび上がった違和感は、最後の最後まで消えずにくすぶりつづけた。歌った本人さえ満足できないような歌が、他人に受け入れられるはずがない。

最近はいつものころだ。歌っても歌っても、はしから違和感がわいてくる。リテイクをくり返すほど声は疲れ、それでも違和感は大き

くなるばかりで、いつかは歌がきらいになってしまいそうで怖くなる。

「すみません、今日はもう」

申しわけなさでいっぱいになりながらマイクに伝えて、うつむいた。マネージャーの野宮が表情をゆるめてうなずいたので、怒られることはないみたいだとほっとする。

スタジオの扉を開けると、とたんに雑音が耳にはいりこんでくる。歌手になるまでは気付くことのなかったわずかな環境音だ。野宮とエンジニアの会話も、そのときになってじかに伝わってくるようになる。

「もう六時をまわったし。終わりにしましょうか」

「今までのデータはどうします？ 一応残っていますが」

野宮の目が一度、小夏に向けられた。視線がからみ、小さな間のあとに彼女は首を振った。

「本人も納得がいていないようなので、消しておいてください」「わかりましたー」

間延びした声が了承する。わたしはなにも言っていないのに、と恨めしげに小夏はパソコンの画面を見やった。そんな彼女の心中に気付くふうもなく、画面の中の歌唱データはまたたく間に消去されていった。エンジニアは回転式の椅子をくりと反転させて問う。

「次はいつにします？ 学校もまだあるのかな。今までどおり一週間後の土曜ですかね？」

「そこにはまた別のレコーディングがあるので……それが終わるまでは、この曲は延期ですね」

今日で終わらせるはずだったのに。言外に苛まれているような気がしてくる。

しかしそのニュアンスに傷心するより先に、小夏の頭には疑問符が浮かんだ。

(いまのって)

ぱっと野宮の顔を見上げる。

別のレコーディングがあるだ

んで、そんな話は一言も聞いていない。

「野宮さん、今の、どういう」

「あら、言ってなかったかしら？ 同じ事務所の相手からコラボ楽曲の申し入れが来ててね、それを受けたの」

「だれと」

「誰だと思っ？」

「野宮さん！」

「SHEENAさんよ、あの」

し……っ、とすつとんきような声をあげてしまって、口元をおさえる。

“あの”。そんな一言が添えられるほどに、今となっては有名な名前だった。音楽界に現れた彗星、低迷しかけたこの世界に差した光芒。雑誌や新聞を見れば称賛の嵐で、今世紀最高の歌手だと噂されることもしばしば。

そしてその名は、小夏がいちばん聞きたくないものでもあった。

しいな、シーナ、SHEENA。半年前のシングルCDランキングで、自分の上にその名前を見つけてしまったそのときから不調続きだ。なにを歌ってもいまいち納得がいかない、売り出した楽曲はどれもこれもSHEENAのそれにはかなわない。

世代の女子高校生歌手、兩宮小夏の名は、いつのまにか人々の頭から消え去っていた。

そんな相手からコラボレーションの申し入れだ。自分の意思が通るのなら四の五の言わずに却下しているところだけけど、あいにく立場が弱いのはこちらのほう。なにか言おうものなら子どももの文句だと取られてたしなめられるのが関の山だ。それがわかっていくせに、ただで認められるほど大人にはなれなかった。

「それじゃあ、SHEENAの顔は」

「SHEENA、さん」

「……SHEENAさんの、顔は見られるんですか？」

小夏の言葉を受けて、エンジニアが手を叩いた。

「そりゃあいい！レコーディングの際にはぜひうちのスタジオを。覆面歌手のご尊顔がおがめるのであれば、料金の方もお安く……」
「いいえ、SHEENAさんのレコーディングスタジオはもう決まっているそうなので。小夏ちゃんとは別の日に録るから、お会いすることはないわ」

小夏とエンジニアがふたりで肩を落とす。

SHEENAの人気を手伝っているのが、いつそ厳格なまでの機密性だ。顔はおろか、性別も年齢も秘密とされている。歌声には男声と女声の両方を使い分け、さらに楽曲のそれぞれが異なった声色を持つ。もちろん顔だしのテレビ出演はすべて断り、ラジオなど肉声が入るメディアにすらも現れない。

いつかSHEENAは二人組ユニットなのではないかと噂されたこともあったが、事務所側は断じてひとりだと主張を続けた。その確証はどこにもないにも関わらず。七色の声を持つ覆面歌手として売り出されたSHEENAは、確かな歌唱力も相まって老若男女を問わず急速に支持されていった。

その波の広がりには、小夏の機嫌を損なうには十分すぎるほどで。

「それじゃあ、ご挨拶にうかがうぐらいは」

「小夏ちゃん」

「だめ、ですか」

深くうなずかれ、小夏は口をへの字に曲げる。 気に入らない。

クラブの相手にも顔を見せないなんて。

「初めての共同制作の相手選ばれたらしいから、ね？」

野宮の声に、かすかに苛立ちが混じった。聞きわけがないと思われているに違いない。ぶんむくれた顔で分かりましたとだけ答えて、そっぽを向いた。険悪になりかけた空気を感じ、エンジニアが頬をかく。

「今日はおしまいですかね？」

「ええ、ありがとうございます」

彼がさっさと道具を片付けて立ちあがると、多大な負荷がかけら

れていたことを示すように椅子がきしんだ音をたてた。

ひとこと、ふたこと、マナージャーとエンジンアの間に言葉が交わされる。それらは小夏の耳にはまったく入ってこない。どうにもいたたまれなくなった。

「……おつかれさまでした！」

通学用の鞆を手にとり取って、頭を下げあう二人の間をすり抜けた。

弾かれたように部屋を出る。小夏ちゃん、と名前を呼ぶ声も聞かぬふりをして、走る一歩手前の早足で廊下を抜けていく。ごめんなさい、ごめんなさい、次はもっと上手に歌うから。そう心の中で叫びながら。

途中途中でかかるねぎらいの声にも答えずにいると、ますます自分がみじめになっていくようで胸がつまった。自分の足元の影だけをにらみつける。勇み足で歩きたびに硬い足音がスタジオに響いて、職員たちがなにごとかと小夏をふり返った。

なんて、弱い。

歌が大好きで、ずっと歌っていたくて、その願いを叶えるために歌手になったというのに。人気なんか出なくてもかまわない、自分の歌を聞いてくれる人たちに届けばいい。そう思っていたはずが、今ではその歌でさえ嫌いになりかけている。

歌が好きなのか、それとも歌手という立場が好きなのか。即答できる自分でいられなくなっていた。

泣きたいやら情けないやら。プロなのだから、これぐらいのことではいちいち心を乱されてはいけないというのに。

（腹が立つ、つたら！）

いらだち紛れに思いきり建物の扉を開くと、がっんと振動が伝わってきた。なにかにぶつけてしまったのか。どきどきしながら扉の向こうをのぞいた小夏の顔から、さっと血の気が引いた。

相手は人だ。それも男の子。

自分と同じか少し下ぐらいの年にみえるが、制服を着ていないため学生なのかすらわからない。運動など知らないような白い肌に、

男子にしては細い骨格。無言で頭を押さえてしゃがんでいるのは、扉から入ろうとしたまさにその瞬間に、小夏がそれを押しひらいてしまったからかもしれない。

「ごめんなさい、……だいじょうぶ？」

あわてて小さな隙間から外へ出て、彼の隣にかがみこんだ。う、とうめいた声は、外見にたがわず中性的でやわらかい響きを持っている。すこしだけ鼻声ではあるものの、そこに不快感はなかった。

「だい、じょうぶ……です、すいませ、」

そんな声が、口の中でくぐもる。むしろそれは小夏の心配をあおった。大きなたんこぶができているかもしれない、手当ては必要だろうか。

小夏の心配をよそに彼はぱちぱちと数回まばたきを繰り返して、やっと彼女を見あげる。身長は低いみたい、と、おぼろにそう思っている。目があつた。彼はげんそうに眉を寄せたりのぼしたりしたあとに、はっと息をのんだ。

「あまみや、こなつ」

そう呼び捨てにされたことを、喜んでもいいものだろうか。

マネージャーの弟くん

瀬尾小夏。それが小夏の本名だ。芸名である“雨宮小夏”も名前の字面はまったく変えていないだけに、見ず知らずの相手に面と向かって呼び捨てにされると言葉につまってしまう。最近ではマネージャーと会話をすることが多いので“ちゃん”付けに慣れてしまっていたけれど、久しぶりに呼ばれた歌手としての名前には背筋が伸びた。

「ごめんなさい」

言うことに困って、とりあえずもう一度だけ謝っておく。すると相手は小刻みに首を振った。

「こつち、こそ。すいません、邪魔なところに立ってて」

「悪いのはわたし」

怒ったつもりはないのだけれど、彼はしゅんと肩を落としてしまう。声がかきつくなくなってしまっただろうか。くせのようなもので、なかなか抜けないので困っている。

優しく、優しく。自分に言いきかせて胸をおさえた。立ちあがると、彼も一呼吸おくれて腰をあげる。

「ええと、……スタジオに用があるの？」

歌手としてデビューを果たしていないような一般人でも、代金さえ払えばスタジオハウスを使うのは自由だ。ギターやドラムなどの楽器を貸し出しているところが多く、追加料金でミキシング 音量や音質を調節して組み合わせる作業を頼むこともできる。

とはいっても、たった今小夏が使っていたのはぴんからきりまであるスタジオの中でも高額で、質の高い録音を目指すためのものだ。その料金も、いち学生がぼんと払えるような金額ではない。

だからこそ尋ねただけれど、彼はきょんとしたあとに、いや、と否定する。

「いま、スタジオに姉ちゃ……姉がいて。知ってる ますか」

「敬語じゃなくていいから。続けて」

すると彼は視線をさまよわせ、やがて小夏のそれとぶつかるためらいがちに喋りだした。

「姉ちゃん、歌手のマネージャーで。SHEENAって知ってるかな」

嘘をつかないで、と即答することだけはかろうじて踏みとどまった。その代わりに露骨に顔をしかめてしまつて、これでは突っぱねるのとどちらがよかつたのか分からない。彼は小夏のその表情にいささか驚いた様子を見せたものの、自分の言葉を取りつくるうことはしなかつた。そろそろと彼女をうかがう。

「色々なところをまわつて、次の曲のスタジオを決めているらしくて……あ、そうだ。小夏さん」

小夏と目を合わせ、ほほえむ。

「コラボを受けてくれて嬉しい。ってSHEENAが言つてたつて……言つてた、みたい」

声はどんと尻すぼみになっていったうえ、言い方は遠回しにもほどがある。しかしその言葉の中身に、小夏は目をまるくした。それを受けることになった本人でさえ、今日になってはじめて聞かされた話だというのに。

一般人ではまず耳にできるような情報ではないはずだ。それこそ、SHEENAか小夏の関係者でもなければ。

「ほ、ほんとうに？」

「嘘じゃない。嬉しいって」

こういうときだけはまっすぐに人の目を見るらしい。

「そっちじゃなくて、お姉さんのこと。SHEENAのマネージャーって本当なの」

そう問いかけると、やっぱり信じられないか、と彼はななめ下を向いた。

小夏はしばらく彼をながめたすえ、ひっそりとため息をついた。どうしても嘘をついているようには思えない。これでも業界人なの

だから、初対面の相手をよく観察する目は持っていると思自負している。

信じてみようかという気持ち働いた。わざわざ小夏を騙すためだけにここまで来たとは考えにくいし。

(それに、もし本当なら)

これはチャンスだ。

本人と直接会うには至らなくとも、自分の言葉だけでも伝えられればそれでいい。うまくいけば、その正体をつかむことも夢ではないだろうし。

嘘だったとしても、だまされたと悔しがるだけでいいのなら。小夏はうなずいて、彼の言葉を待たずに口をひらいた。

「S H E E N A に会うことはあるの？」

もちろん彼自身には期待はしていない。要するに、彼からS H E E N A のマネージャーに、さらに本人へと伝わればじゅうぶんなのだ。そう考えていたけれど、予想に反して彼は遠慮がちにうなずいた。

「あ、でも、会わせることはできないから……」

「いいわ、そんなの！」

小夏の声に興奮が混じる。

これでS H E E N A へとつながるパイプができた。百パーセント信じているとはいえないまでも、かけてみる価値はある。

小夏は早まる鼓動をおさえるように、ひとつ呼吸を置いた。

「S H E E N A に言いたいことがあるから、それを伝えて欲しいの」

「……内容にもよるけど、おれでよければ」

長いのもちよっと、と目をそらした彼に、小夏は唇の端をつり上げて挑戦的に笑った。彼の向こうにいる、形の定まらないS H E E N A の影を見すえて。

「ひとつだけよ。 “あんたには絶対に負けない” って」

彼は目に見えてうるたえる。

「え……S H E E N A が、なにかしたの？」

「特になにも。ただ気に入らないの、悔しいのよ」

なにもかも奪ってしまって、平然とあの位置に立っているその歌手がうらめしい。そこはわたしのものだったと叫ぶことなどかなわず、せめてどんな奴なのかと顔を見ることがさえも許されないでいる。…なにが覆面歌手だ、なにが七色の声だ。なんでもかんでも秘密にしておいて、誓ってひとりだから信じてくれとは虫がいいにもほどがある。

もちろんそれをぐちぐちと吐き捨てるのは自分のプライドに反していた。小夏は肩をすくめる。

「それにわたしが不調だから。自分にはっぱかけたいの」

「不調？」

「歌っても満足できないっていうか、ね……そういうときがあるの、歌手って」

わたしはこれがはじめてだけど。胸の奥でそうつけ足した。

「あんたが気にすることじゃないわ、ええと……弟くん」

呼びかたに迷ったすえにそう呼ぶと、案の定彼は眉間にしわをよせる。

「和樹って、名前が」

「はいはい。覚えとくわ、弟くん」

「……聞いてないし」

いいところに収まってしまったのだから仕方がない。初対面の相手を名前で呼ぶのは腰が引けるといいうのも事実だ。

和樹がむすつとしていた前で、鞆に取りつけている時計で時間を確認した。夏が近づいているために、今日の長さはあてにならない。七時半までに家に帰れないのであれば連絡を入れるときつく言われているが、これから急げば間に合いそうだ。彼の横を通り抜けてふり返る。

「じゃあわたしはこれで。伝言よろしくね。あとは頭、ごめんなさい」

「あっ、返事はいつ伝えれば」

返事が返ってくるのが当たり前だと言わんばかりのせりふに、思わず吹きだしてしまふ。和樹はなにを笑われたのかわからないようだけれど、それを説明するつもりは毛頭なかった。

一方的な伝言に、わざわざ返事を返すような律儀な人間。S H E E N Aはどうかやら、そんな相手らしい。

さて次に会うのは、と考えて千夏はそらを見た。うすい水色の空に、紫のグラデーションがかかっている。この水色が完全な藍色に染まるまでには、まだ時間がかかりそうだ。

(事務所に呼ぶわけにもいかないし)

S H E E N Aのマネージャーの弟であれば事務所の場所ぐらい知っているだろうが、直接的な関係があるわけではない小夏が彼と待ち合わせをするのではよからぬ噂がたつおそれがある。そもそも事務所は歌手、ひいては業界人の仕事の場なのだから個人的な要件は持ちこみたくない。野宮に関係を疑われるのも癪だ。

「来週の金曜日、六時。またここでどう？ 学校の帰りに寄るから」
通っている私立の高校は近くにある。部活には入っていないため、長く待たせることはないだろう。和樹がはつきりとうなずくのを確認して、小夏は今度こそ彼に背を向けた。

日が沈みはじめ、足元の影は遠くまで伸びている。まるでマイクのようにだと頭のすみで考えて、苦笑した。どうしても歌からは離れられないみたいだ。嫌いになりかけても、歌がこちらを向いてくれなくても、結局は同じところに戻ってきてしまふ。

(戻れるのかな)

歌手になったときののように、歌うことを心から楽しめた日々に、不安に負けてしまいそうになって首を振った。

「だいじょうぶ」

そうつぶやいて暗示をかける。まだ歌える。好きでいられるかぎり、嫌いにならないかぎり。

わたしはまだ、雨宮小夏でいたい。

風は熱気をはらんで

高校生歌手という肩書きは、嘘いつわりではない。

はじめて歌手を志したのが三年前、小夏が中学三年生に上がったころのことだ。もちろん厳しい両親には猛反発をくらい、もうすぐ受験なのだからと諭された。

もちろん、小夏はそこで諦めることなど選ばなかった。ふたりを納得させるためにと必死で考え、都内でも名のある私立高校に合格することを条件にオーディションに出場することを申し出た。そのころの小夏の学力は中の下がいいところであり、絵空事と思ったのだろう、親も了承した。うちの娘はなにを考えているのかとふたりが話しているのを、陰で耳にしたこともある。

小夏の負けん気は、しかし、そこで力を発揮した。

ぐんぐんと模試の結果がよくなっていくのを見た親が後悔し始めてももう遅い。持てる時間と体力をすべてそこにすぎ込んだ小夏は、するりと難関私立校の門をくぐってしまった。それどころか、大賞など届くわけがないと思われていた彼女はオーディションで審査員に太鼓判を押され、業界に送りこまれることになる。まさに執念がもたらしたデビューだった。

もちろん現役高校生でもあるのだから、勉強を欠かすことなどしない。一度知ってしまった成績上位者の優越感は、彼女にそれを手放すことを許さなかった。家庭での自習と歌手としての仕事で、千夏の休日はまたたく間に浪費されていく。

(……それを選んだのはわたしだから)

後悔をする気はさらさらない。けれど、放課後をスポーツや芸術、自分の思うように使っている同級生たちを見ると、うらやましさがない。にじんでくるのは否めない。三年生ともなれば受験も間近だ。高校生としての最後の時間を充実したものにしたいと思うのは、小夏とて同じことだ。

すっかり誰もいなくなってしまった教室で、黒板に向かって小夏はひとりたたずむ。今年の文化祭の出し物を決めていたのがついさつきの話だ。演劇、漫才、いくつか出された案の中に、歌にかかわるものはなにひとつない。

ひとときわ勉学に秀でた人間が集まった学校の中であつても、小夏はイロモノだ。クラス外の生徒から突然サインを頼まれたときも、特別扱いはできないからと丁重に断った。けれど、クラスメイトたちがそうした行動をしたことはただの一度もない。

遠慮をされているのはわかつていた。とはいっても、敬遠されているわけではない。性格ゆえにリーダーにまつりあげられることは多かつたし、生徒の仲間のうちに入ることもできる。けれど歌手として小夏を“使う”ことを、誰も意見としてあげようとはしなかつた。

（優しいのよね）

小夏は結論づける。

ここは高校生としての居場所。歌手としての小夏を心から応援する人間がいても、それを取り上げて利用しようとする人間はいない。真綿に守られたように、くすぐりたいけれど大切な、彼女の居場所だ。

小夏は、あ、と声をあげた。時計を見れば、もう約束の時間まで三十分を切っている。伝言を頼んだのはこちら側なのだから、せめて時間に遅れないようにしなければ。

私立高校既定の鞆を肩にかける。制服の指定のないこの高校では、その鞆だけが生徒の証だ。

いたるところから届いてくる女子生徒の笑い声を右から左へ聞き流して、小夏は廊下を歩いていった。

できるだけ早足でスタジオの前まで来たつもりだけれど、和樹はその前で平然と待っていた。ブロック塀に寄りかかったまま携帯音楽プレイヤーで音楽を聞いていたが、小夏を目にとめると電源を切

つてイヤホンを外した。

パーカーを着ているせいか、前回より雰囲気は幼い。あの日の翌日には事務所のなかをあちこち見回してみたけれど、どうしても彼と似た容貌の女性は見当たらなかった。誰もがてきぱきと仕事をこなすような女の人たちばかりだから、どこかどんくさい印象のある彼とはつり合わないのかもしれない。

相手に気付かれないように腕時計を見た。まだ六時までには十分を残している。音楽を聴いていたということは、ずっと前から待っていたのだろう。悪いことをしたかな、と小夏は唇をかんだ。

「いつからいたの？」

「そんなに待つてないよ」

ずれた答えを返されたけれど、言わんとしていることは同じだ。

カップルが待ち合わせでもしているかのようなかけ合いをしていたことにむずがゆくなつて、小夏はさつさと話をそらすことにする。

「それで…… SHEENAには会えた？」

「ああ、会えたよ」

和樹はほころぶように笑う。

「“雨宮小夏さんと一緒に歌えて嬉しい”って」

「……は？」

「だから、雨宮小夏さんと」

「あーもういい！ 聞こえてるから！」

二度も同じことを言われてたまるかと、小夏は首を振つてさえぎる。その言葉にもう続きがないことは、目をぱちくりさせた和樹の様子を見ても明らかだ。

敵対心をむき出しにした小夏に対し、泰然とした態度で返してきた。まるで軽くあしらわれたようで、小夏は憤慨する。

「なによ、なあにが“嬉しい”よ！ 見てなさい、SHEENAが腰を抜かすぐらいの歌を……」

ほんとうに歌える？

言葉に詰まった。歌って、と繰り返しても、その先が続かない。

金づちで殴られたように、勢いがかき消えていく。急激に冷えていく頭の中で、自分に問いかけてしまった。今の自分に 自身の歌すらもまともに歌えない今の自分に、ほんとうにSHEENAを超えるほどの歌を歌えるのか、と。

不安になり始めてしまえばもうだめで、疑い始めれば止まらない。「小夏さん」と名を呼んだ和樹に顔を向ける。

痛々しいものでも見るかのような視線とぶつかって、今の自分はそんな表情をしているのかと遅れて理解した。理解はしたけれど、自信にあふれた笑顔などもう取り戻せはしなかった。

「わたしは」

歌えると。歌えると言え。

なかば脅迫概念のように凝り固まった、小夏の中の黒々としたなにかが声をあげる。ここで負けてしまえば、今まで強く保っていた自分が崩れていってしまうから。だから歌えると、言わなければ。言わなければいけない。和樹の目をしかと見つめる。そのくせ、彼の瞳の中に映る自分は、ひどく頼りなさげだった。

ねえ。

胸の奥に忍びよる、低い声に思考が止まる。それは紛れもなく彼の声のはずなのに、確証が持てない。別人のような声に戸惑う小夏に向けて、和樹はかすかな笑みを浮かべている。

「小夏さん、歌うことは楽しくなくなっただけ？」

そんなことはない、と答えることはできなかった。

大好きだと、胸を張ることもできなかった。

それが今の小夏をありありと示している。自身が、迷ってしまった。ていた。

「昔のほうが楽しそうだった。気持よさそうだったよ」

「……なんで」

「ずっと雨宮小夏のファンやってればわかる。好きだから」

撃ち抜かれたような心地がした。

自分の歌を、雨宮小夏を、はじめて好きだと言ってくれたのは誰

だったろう？ たった一枚のファンレターが、涙が出るほど嬉しかったのはいつだったろう。それが遠い昔のことのように思えて、二年と少しの歳月はそんなにも長かったのかと錯覚してしまう。

好かれるために歌を歌っていたわけじゃない。ただ誰かに、自分の歌を聴いてほしかった。歌っていられれば幸せで、それに耳を傾けてくれる相手がいればそれで十分だった。

（どうして気づかなかったの）

いまも歌い続けていられるのは、雨宮小夏を愛してくれる人がいるからだ。自分自身が見失いかけた彼女の歌すらも、聴き続けてくれる誰かがたしかに存在するからだ。そして彼ら、彼女らには決して嘘をつけない。違和感をごまかして無理やりに音源に詰め込んだ歌は、こうして簡単に見破られてしまう。

（はずかしい）

自分を嫌いになることは、ファンを裏切ることだ。歌手は、表現者は、誰よりも傲慢でなくてはならないのに。自分の歌に誇りを持って歌い続けることこそ、プロとしての役目だというのに。

「なによ、」

弱々しい声が出た。そのとたんに、まずい、と顔色を変えた和樹は、女の子を泣かせてしまうことにとまどっているのだろう。他人

それも女性に対しては強く出られない少年なのだというところは容易に想像できて、そんな彼の言葉で心が震えるほど嬉しくなったことが悔しくて、小夏はもう一度「なによ」とつぶやいた。

「あんだ、SHEENAのマナージャーの弟くんじゃない。わたしなんか商売敵じゃない」

「個人の趣味は関係ないと思います」

そう言っとななめ下を向く。

「そんなもんなの？」

「そんなもんです」

「……ありがとう」

「どういたしまして、……え」

どうして礼を言われたのか、とばかりに和樹はぽかんと口を開けた。

その間のぬけた顔を見ていると、ほんとは悩みごとなど何こともなかったかのようには思えてきた。ただ、今まで見えていたものが見えなくなってしまうっていただけ。それだけだった。迷走していたことすら、馬鹿馬鹿しく思える。

穏やかに息を吸いこんだ。

「SHEENAにもうひとつ、伝えてもらってもいい？」

「ケンカはちよつと……」

「もう違うわよ」

唇をとがらせるが、先にケンカをふっかけたのはこちらの方だ。

小夏はわざとらしくせき払いをして、それから声をやわらげないようにとあえて気を遣う。

「“こちらこそ”って。あと、“手を抜いたら承知しないから”って伝えておいて」

「……どうしてそんなにきついな」

「ずいぶん丸いでしょうが！」

言葉がつっけんどんなことは否定しない。やはりうつうつと恨んでいた相手なのだから、そう簡単に好きになることは難しそうだ。その恨みの大半が八つ当たりであることには、今やっと気付いたばかりだけれど。

ふわり。

小夏の髪をゆらして吹き抜けた風には、とくに熱気が混じっていた。梅雨の時期から夏へと、それは早くも移り変わるうとして、湿気はいよいよ消えていき、太陽はやがて高くに上るだろう。ぽっかりと浮かんだ入道雲から、陽炎を洗い流すような大粒の雨が落ちる季節が、もう少しでやってくる。

雨宮小夏の名が生まれた、その季節が。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6825y/>

レイニーソング

2011年11月22日03時14分発行